

(鹿屋市白崎町字高付)

位置と環境

遺跡は、市街地から南東側へ約2.5km離れた地点に所在する。調査区はかつてシラスによって形成された台地状地形を形成していた所である。その後、高隈山系を源とする肝属川が蛇行しながら南流し、度重なる氾濫と浸食作用によって谷底平野ができあがっている。周辺の標高は約14mを測り遺跡の南西側を走る河川の水量は豊富とは言えないが、その流域には豊かな水田が開けている。

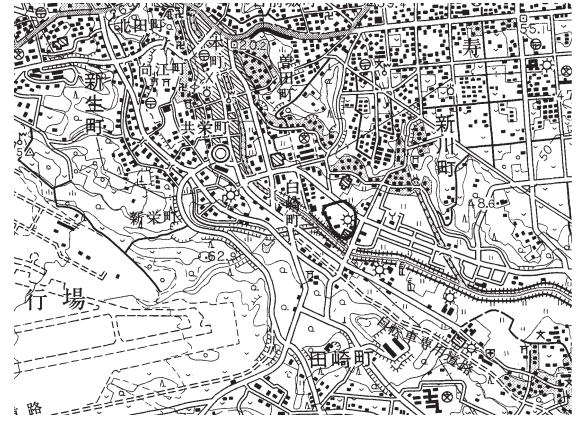
調査の経緯

昭和57年度に実施された鹿屋市営住宅建設工事に伴う外構工事中に、水田下約1.5mのところから多数の土器片が発見された。市教育委員会は市建設課から埋蔵文化財資料の発見について連絡を受けた。そこで今後の取り扱いについて県教育委員会と協議をした。工事中発見の場所は工事により損壊していたので、今後の工事計画に基づいて、県教育委員会の協力を得て、昭和57年度(100㎡)、昭和58年度(500㎡)に本調査を実施した。その後、同遺跡内において区画街路新設工事業の実施計画に伴い、平成5年度には鹿屋市教育委員会が調査主体となり、確認調査及び本調査(879㎡)を実施した。

遺構と遺物

住宅建設工事中では成川式土器の完成品2個とパンケース1箱分の土器片が発見、採集された。57年度の調査地は水田の下で各所から湧水が湧き出す状況にあり調査に困難をきたした。遺物は地表下約1.5mの地点に弥生時代から古墳時代の遺物が混在する状況で確認され、整然とした出土状況は把握できなかった。中には瀬戸内地方からの移入土器ではないかと思われるもの、山ノ口式系土器、安国寺式系の櫛描波状文等を有する土器、古墳時代の成川式系の土器、土師器等が見られた。

昭和58年の調査区は、湧水が随所に見られるような不安定な場所であった。このような中で溝状遺構・土器溜りを検出し、土器溜りを中心に弥生時代から古墳時代にかけての土器片や石器が混在する状

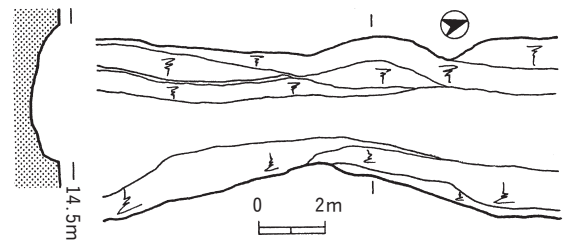


第1図 高付遺跡の位置

況の中で発見された。

遺構は、2基の溝状遺構が検出された。いずれも南から北側へ緩やかに走り、幅1.5~2.5m・深さ0.3mを測る(第2図)と幅0.5~1.0m・深さ0.15mを測る規模を持ち、断面は皿状となる状況が検出できた。

覆土中から土師器や青磁片が出土することから、



第2図 溝状遺構

時期はやや新しいものとされ、周辺の状況から水田の排水路的な性格を持つとも考えられるが、層位的に把握することはできなかった。

出土した土器は、弥生時代中期後半に位置づけられる山ノ口式土器(第3図3)、弥生時代終末から古墳時代初頭に位置づけられる(第3図4)、成川式土器に見られる古墳時代の土器(第3図5)がある。特殊なものとして、瀬戸内地方からの移入土器ではないかと思われる(第3図6)、河内系と考えられる土器(第3図7)、安国寺系と思われる(第3図8)等の大小の土器片が出土することから、文化伝播等の他地域との交易を彷彿とさせる興味ある資料が出土している。ほかに古墳時代に盛行した手捏ね土器も多数発見されている。

出土石器としては、軽石加工品・石庖丁（第3図9）・石鎌（第3図11）・磨製石鎌・砥石・敲石等が見られる。

平成5年の調査地区は昭和58年に実施された調査区の隣接地であり前回と同様の条件の中で調査は実施され、溝状遺構や土器・石器が発見された。

遺構は3基が確認され、内2基の遺構は溝状遺構であり昭和58年に確認された遺構に規模・形態等が類似することから、同一使用目的の施設ではないかとも思われる。ほか1基の遺構は表土層近くで検出された排水の施設である。その形状は長くU字状の溝を掘り、そこに大小の軽石を敷き詰めたり、孟宗竹を半截し横たえる等、このような地勢の中で排水の施設のあり方を工夫したそう遠くない我々の先祖の知恵を垣間見ることのできる珍しい資料を見ることができた。

遺物は昭和58年の調査資料と同様の資料が得られている。ほかに縄文時代晩期の黒川式土器（第3図1）刻目突帯文土器（第3図2）等が発見された。

遺跡の状況から、肝属川の氾濫による二次堆積ではないかと考えられるものの、出土資料から遺跡の中心からさほど離れていない場所に生産遺跡の存在を予想させた調査区であった。

特徴

側縁に抉りを持つ石庖丁（第3図10）や打製の石鎌と考えられる石器の出土は、本県では珍しいものである。

資料の所在

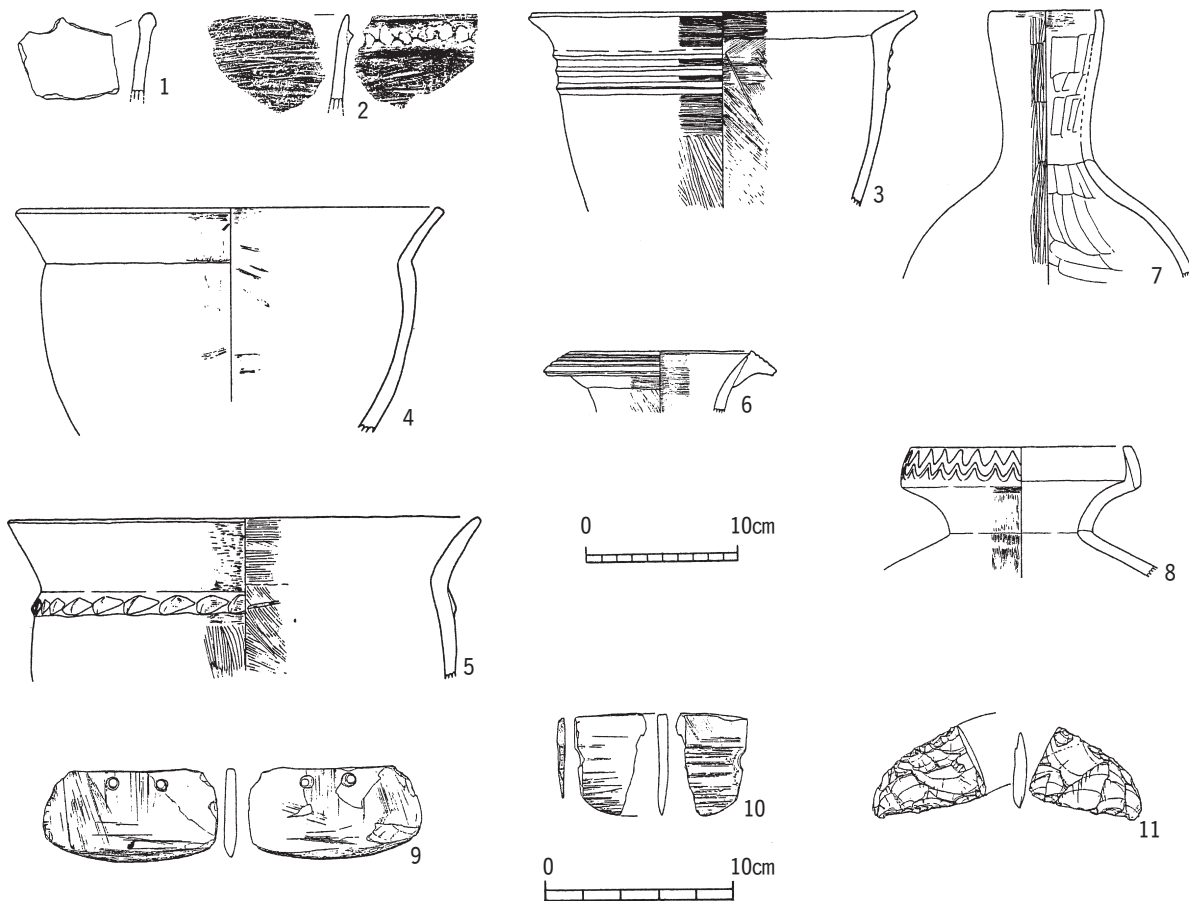
出土遺物は、鹿屋市教育委員会に保管されている。

参考文献

鹿屋市教育委員会1984「高付遺跡」『鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書』2

鹿屋市教育委員会1994「高付（II）遺跡」『鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書』31

（山口俊博）



第3図 出土遺物